

2011 年 4 月 23 日

## 太秦・嵯峨野地域の遺跡 3 —古墳の時代 巨大古墳の系譜—

(財)京都市埋蔵文化財研究所 丸川 義広

### 1 西京区大枝山古墳群から考える

#### (1) 経緯

- ・第 1 次調査 1980 年 5 月～12 月。4・5・14・23・24・25・26 号墳の発掘調査。全体の地形測量。古墳個々の墳丘測量。開口石室（15・18・20・21 号墳）の実測。
- ・第 2 次調査 1983 年 9 月～1984 年 1 月。4・14 号墳の解体調査。22 号墳の発掘調査。
- ・第 3 次調査 1987 年 2 月～4 月。21 号墳の石室内の発掘調査。保存区域の古墳の修景。14 号墳の移築復元。
- ・調査報告書 『大枝山古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 8 冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989 年
- ・京都市による史跡指定 「大枝山古墳群（指定）」『京都市の文化財』第 18 集 京都市文化市民局 2000 年

(2) 古墳群の出自 古墳を築いた人々は大枝の南方ではなく、東方（嵯峨野）の平野部に住したと思われる。根拠は、南方は耕作地が狭いこと、立地条件や横穴式石室の形態が東方に類似すること、古道との関連性、などである。

(3) 秦氏との関連性 嵯峨野に出自を求めると、渡来系氏族の秦氏との関連性が考えられる。秦氏は「葛野大堰」に代表される土木技術で有名であるが、織物（養蚕）も主たる産業であった。養蚕にとっては桑が不可欠で、桑場（園）は山代に近接する桑田郡（亀岡市の前身）と推定できる（『日本書紀』雄略天皇十六年七月条）。大枝山古墳群は、山城と丹波を結ぶ古道を意識して造られたとみられるので、桑場を管理する秦氏の一集団が古道沿いに造った墓地と考えるのが良いであろう。

### 2 巨大古墳の系譜から考える

#### (1) 山田から嵯峨野へ墓域の移動

- ・山田には首長墓が数基確認されるが、可耕地は少なく、集落遺跡も顕著でないため、葛野全体の首長墓とみるのがよい。のちに墓域が嵯峨野へ移動したのであろう。

#### (2) 嵯峨野は北山代（葛野）全域の墓域とみる

- ・嵯峨野の古墳は、平野部に対しての数・規模・内容が卓越するため、北山代全域の墓域であったと考えられる。

#### (3) 嵯峨野での首長墓の編年

- ・田辺昭三氏の編年案（1970 年）と丸川の編年案（2002 年）の違いについて。
- ・最初の首長墓は仲野親王墓古墳とみる。立地条件が優れるためである。横穴式石室が知られ、最初の首長墓にふさわしい。
- ・段ノ山古墳は「古墳」であろうか？
- ・天塚古墳を 6 世紀前半の定点とみる。「一墳丘三石室」（横穴式石室が三基ある）の特異な前方後円墳であるが、中心主体部は未知見である。

- ・円墳では大覚寺 1 号墳（丸山古墳）が古いとみる。家形石棺の配置は手前が古く、奥が新しい。大和の見瀬丸山古墳（欽明陵か）と類似する。

- ・蛇塚古墳と双ヶ岡 1 号墳はほぼ同時で、最後の首長墓とみる。そうなると蛇塚古墳が前方後円墳であることは不自然であるから、円墳の可能性も想定される。

#### (4) 中規模古墳にみる古墳の階層性

- ・首長墓と群集墳の中間の規模をもつ古墳が存在することは、首長—官僚—家父長という階層構造があったことを示しており、葛野に「地域政権」が存在したことを示す。

#### (5) 嵯峨野の群集墳の特徴

- ・立地 山頂・山腹・谷間に群集墳が展開する。谷間をはさんで向かい合い、谷間が共通の墓域であったことがわかる。従来『遺跡地図』のグルーピングは適切でない。

#### (6) 群集墳の出現と終焉

- ・6 世紀前半に常盤御池古墳が築かれるが、その後の展開は不明瞭である。
- ・6 世紀後半から 7 世紀に多数築かれる。個々の古墳は規模が大きく、密集度も高い。
- ・7 世紀に入ると横穴式石室は小型化し、無袖となる。中葉以後は低墳丘の方墳となる（音戸山古墳群）。

### 3 秦氏の動向から北山代を考える

#### (1) 『日本書紀』にみる秦氏関連の記事

- 1-1 応神 14 年条「弓月君が百濟よりの来帰」
- 1-2 応神 16 年 8 月条「弓月の人夫を率いて葛城襲津彦と共に来る」
- 2-1 雄略 12 年 10 月条「秦酒公が天皇に侍り琴で天皇を悟らす」
- 2-2 雄略 15 年条「秦の民を聚め秦造公に賜う。庸調を奉納し禹豆麻佐という」
- 2-3 雄略 16 年 7 月条「桑に宣き国県に桑を殖え、秦民を遷して、庸調を献上させる」

- 3-1 欽明即位前紀「秦大津父を山背国紀郡深草里より探し出す」
- 3-2 欽明元年8月条「秦人の戸数、総て七千五十三戸、大蔵掾を以て秦伴造としたまふ」
- 4-1 推古11年(603)11月1日条「秦造河勝が仏像を受け蜂岡寺を造る」
- 4-2 推古18年(610)10月9日条「秦造河勝が新羅の使いの導者となる」
- 4-3 推古31年(623)7月「葛野の秦寺に新羅の仏像を入れる」
- 4-4 皇極3年(645)7月条「葛野の秦造河勝が常世の神事件で大生部多を打つ」
- 5-1 天武12年(683)9月23日条「秦造ら38氏に連姓を賜う」
- 5-2 天武14年(685)6月20日条「秦連が忌寸姓を賜う」

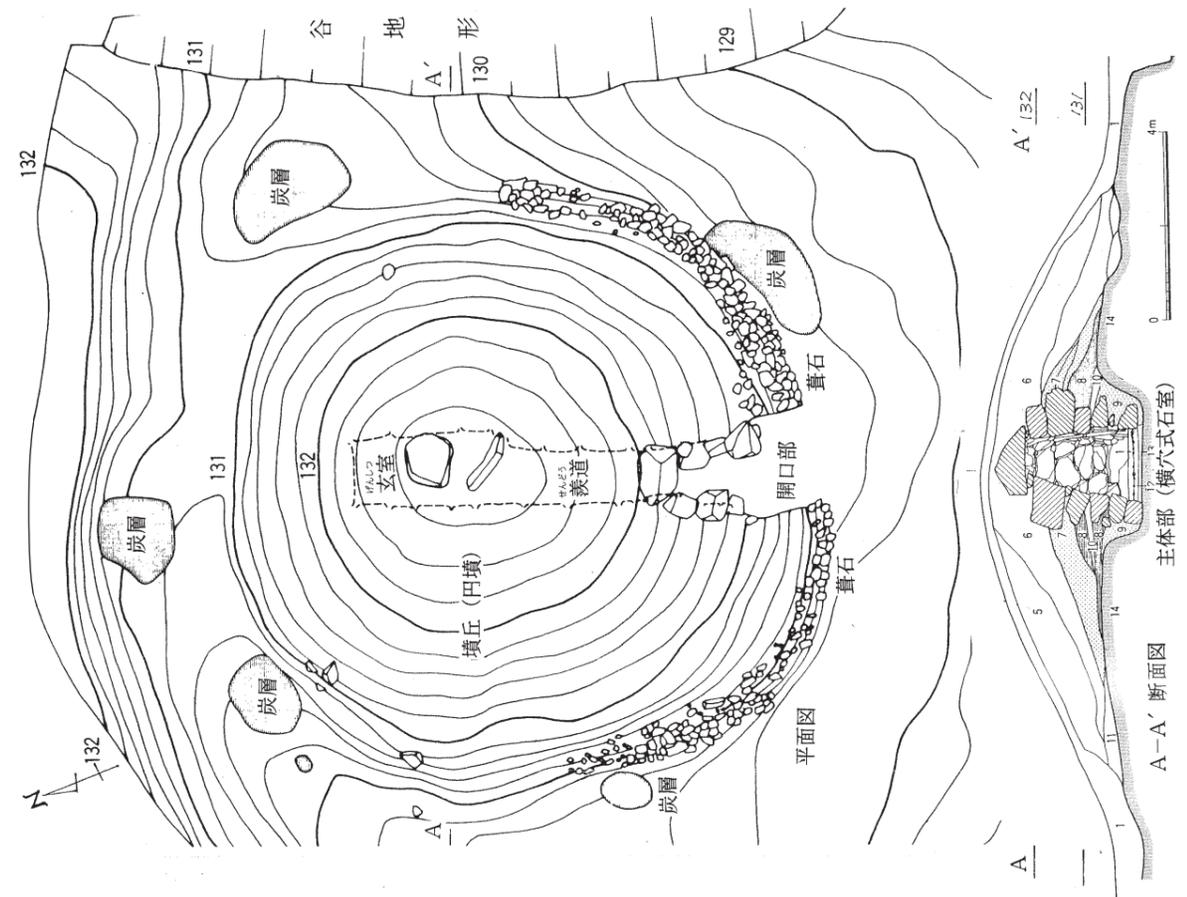
(2) 『続日本紀』『日本後紀』にみる秦氏の記事 (一覧表)

(3) 『古語拾遺』雄略天皇「蘇我麻智宿禰をして三蔵(斎蔵、内蔵、大蔵)を検校させ、秦氏をしてその物を出納せしめ、東西の文氏をして、その簿を勘録せしむ。これを以て漢氏の姓を賜ひて内蔵・大蔵と為す。今、秦・漢の二氏を内蔵・大蔵の主鑑・蔵部と為す縁なり。」

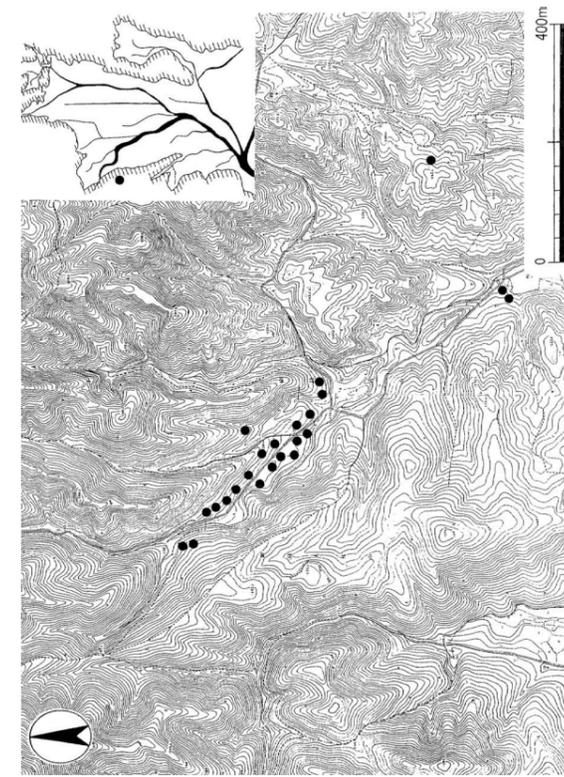
#### 4 まとめ

5世紀後半、雄略天皇はヤマトの大豪族、葛城氏を滅ぼし、渡来集団を配下に納めた。それらは再編成され、秦氏や漢氏が創設された(部民制)。秦氏は蘇我の下に組み込まれ、大蔵の職を占め財力を蓄えた。また山代の開発に派遣され、桂川上流に「葛野大堰」を築き灌漑用水を確保、可耕地を増大させた。亀岡盆地一帯に桑場を設置し、絹織物を貢納することで発言権を増大させた(太秦の語源)。欽明朝においても大蔵の地位を占め天皇に近侍した。推古朝から皇極朝には秦河勝が活躍するが、それ以前の数代にわたる首長墓はこれらをさすのであろう。秦河勝は厩戸皇子(聖徳太子)に近侍し仏教文化を受容し、飛鳥時代には太秦が北山代の中心地となった。奈良時代には藤原氏と婚姻関係を結び、桓武天皇にも接近した。長岡京造営の責任者であった藤原種継の母は秦氏、平安京造営の藤原小黒麻呂も妻は秦氏であった。桓武天皇は「新王朝」を創始し、長岡宮・平安京遷都を実現させたが、その中で渡来系氏族秦氏の果たした役割はきわめて大きいといえる。

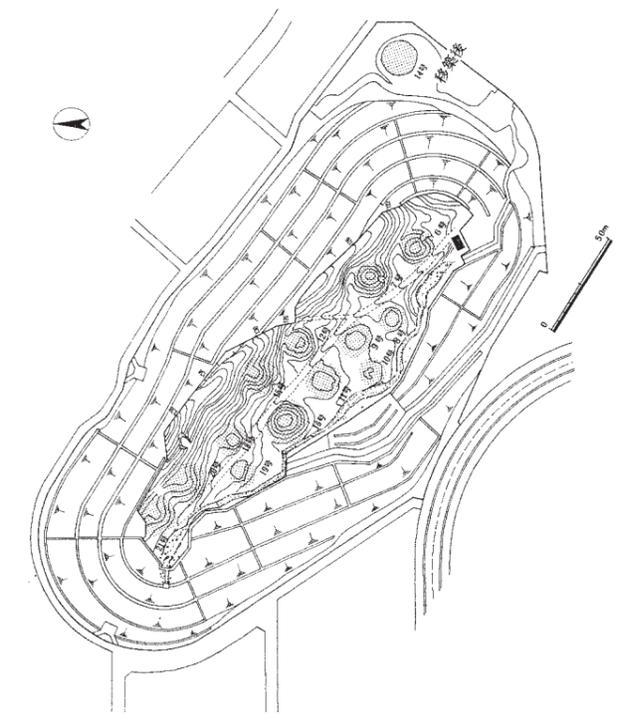
なお、秦河勝の存在があまりにも大きかったため、各地に「秦」「川勝」「太秦」の地名が生じた。西京極の「川勝寺」「郡」も、かつての秦氏の居住域が伝承として残ったのであろう。



大枝山14号墳の墳丘図  
『大枝山古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第8冊より作成

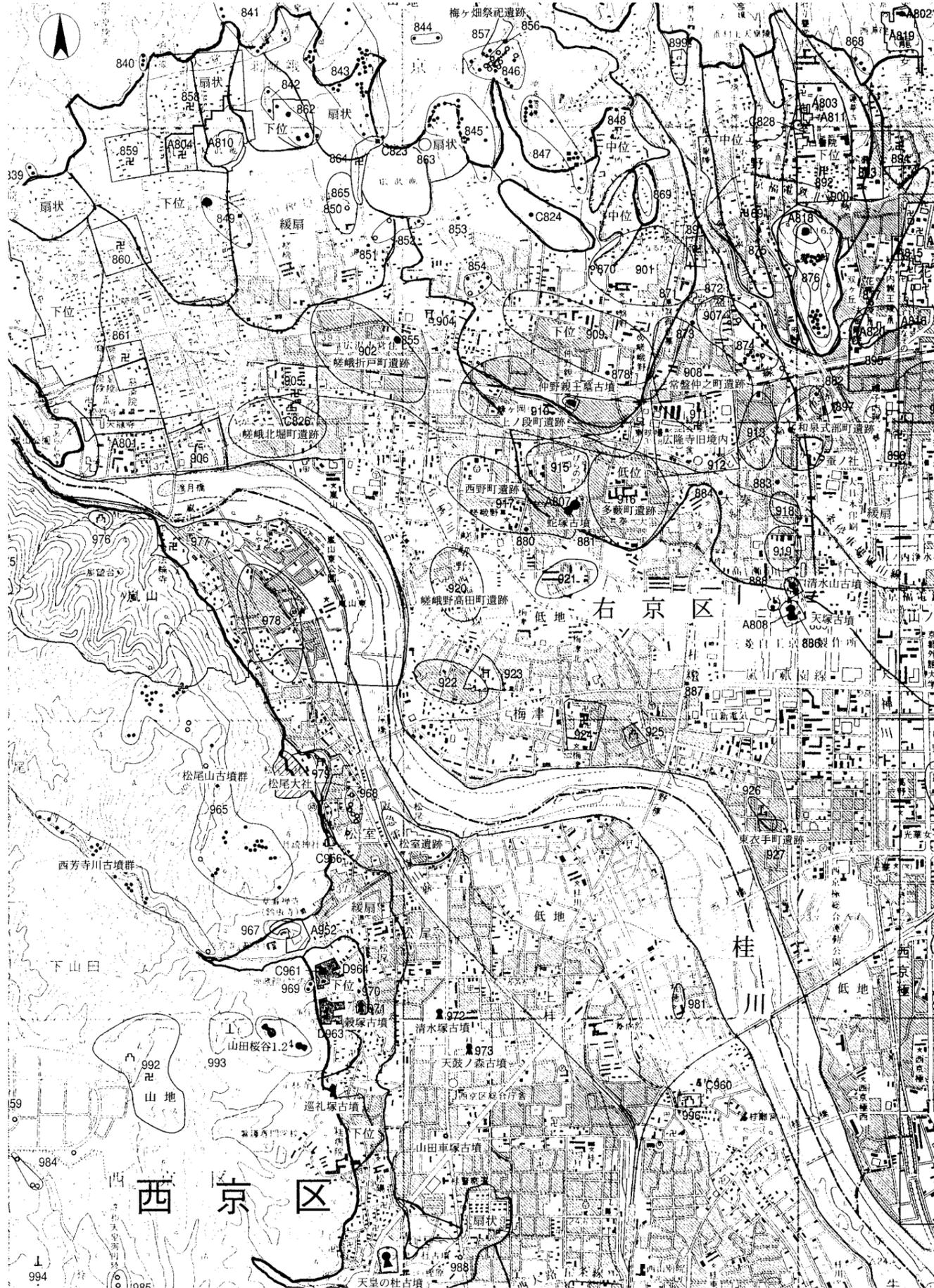


大枝山古墳群位置図(旧地形)  
『山背の古墳』京都市文化財ブックス第6集より



大枝山古墳現況図  
『京都市文化財だより』第33号より

地形分類 「中位」「下位」「低位」=段丘面の区分、「扇状」「緩扇」=扇状地の区分



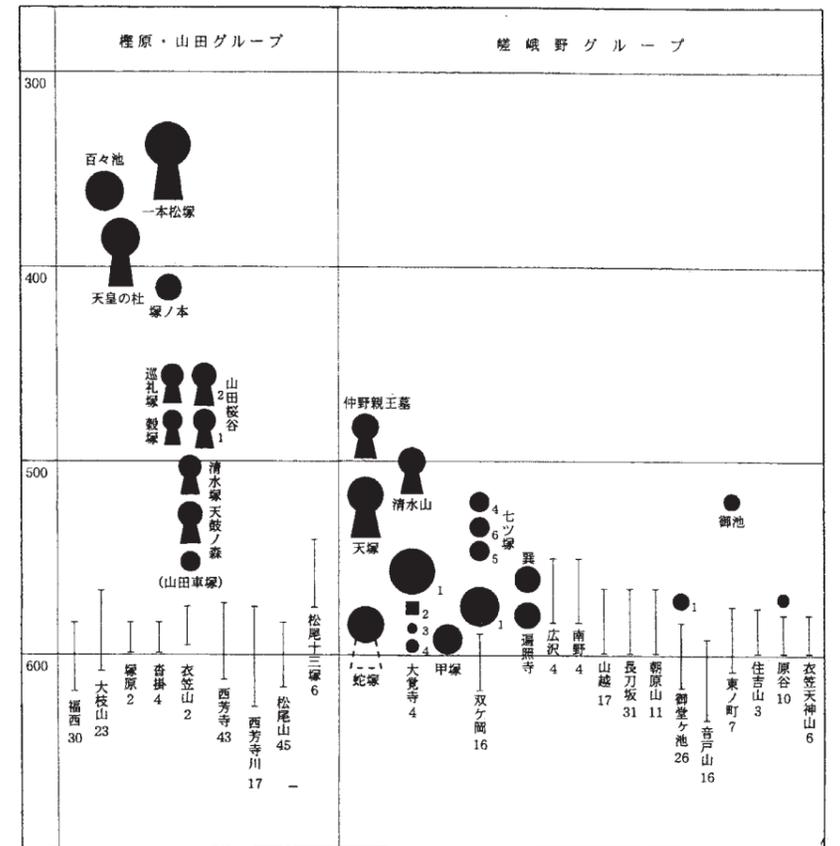
京都市右京区・西京区の遺跡と地形分類  
『京都市遺跡地図』2003年版に『土地条件図』1977年の地形分類を加筆

桃山	深草	八坂	嵯峨野	燈原	向日町	長法寺
	33	30		16	1	
	31	31		17	2	
	35			18	3	
	36	32		19	4	
38			23	20	5	
39			21	21	6	
			26	22	7	
			27	23	8	
			28	24	9	
			29	25	10	

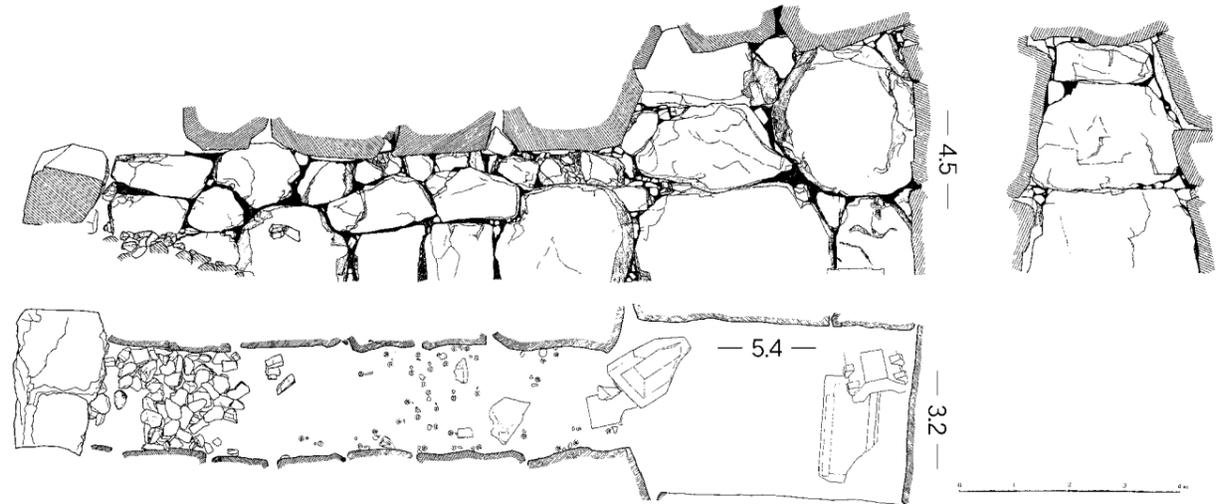
図32 貴長藩の系譜 1南原古墳、2鳥居前古墳、3恵解山古墳、4細塚古墳、5稲荷山古墳、6井ノ内車塚古墳、7芝一号古墳、8今里大塚古墳、9元塚原古墳、10寺戸大塚古墳、11北山古墳、12無名古墳、13元稲荷古墳、14妙見山古墳、15寺戸車塚古墳、16一本松塚古墳、17百々池古墳、18塚ノ本古墳、19天皇ノ杜古墳、20綾塚古墳、21清水塚古墳、22天鼓ノ森古墳、23段ノ山古墳、24清水山古墳、25天塚古墳、26仲野親王墓古墳、27馬塚古墳、28蛇塚古墳、29双ヶ岡古墳、30將軍塚二号古墳、31同3号古墳、32八坂古墳、33徳荷山ノ尾古墳、34同二ノ尾古墳、35同三ノ尾古墳、36仁明院北方古墳、37番神山古墳、38黄金塚二号古墳、39黄金塚一号古墳、点線は推定復元墓、実線は現存墓

『京都の歴史1』1970年

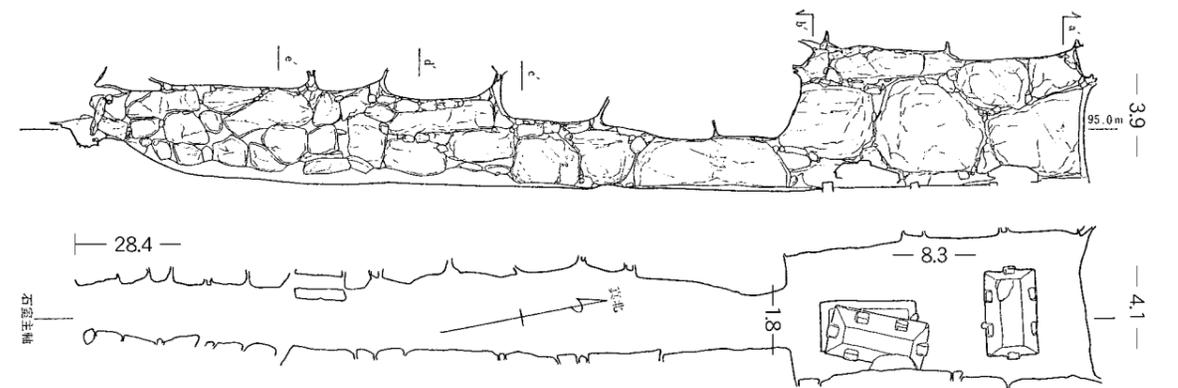
古墳の編年表



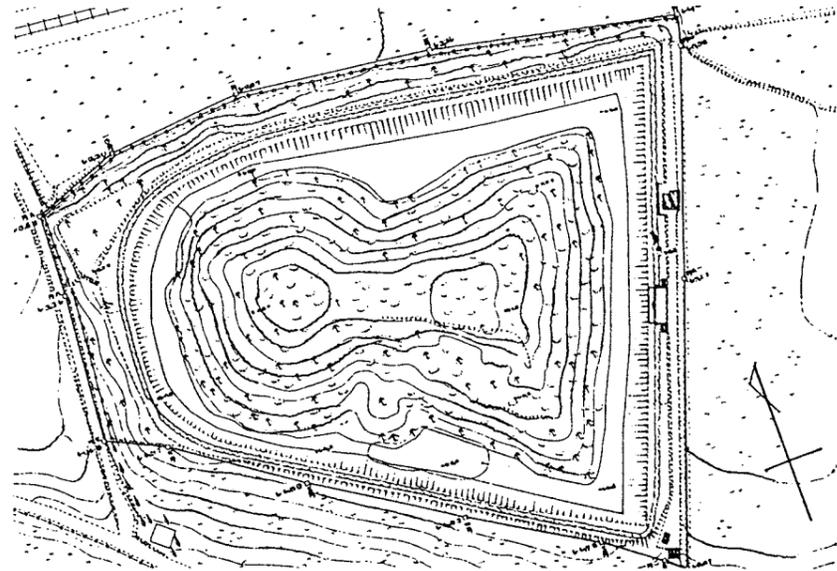
『田辺昭三先生古稀記念論文集』2002年



大覚寺1号墳(丸山古墳)の横穴式石室 (『書陵部紀要第53号』平成13年度)

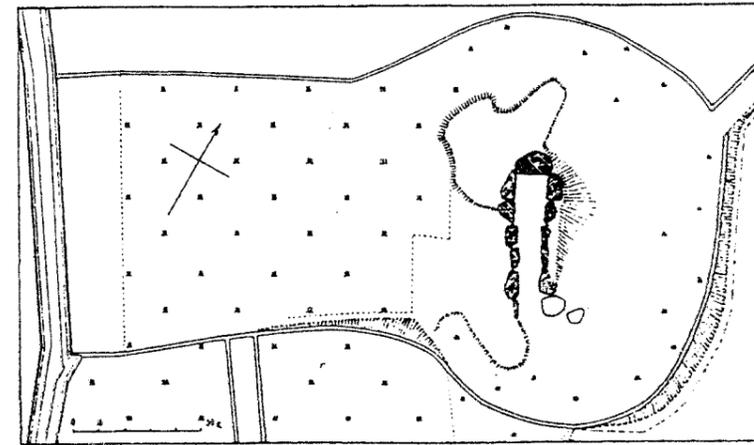


奈良県見瀬丸山古墳の横穴式石室 (『書陵部紀要第45号』平成5年度)

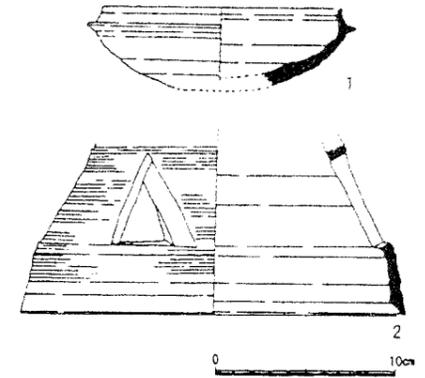


仲野親王墓古墳（『前方後円墳集成』近畿 1992年より）

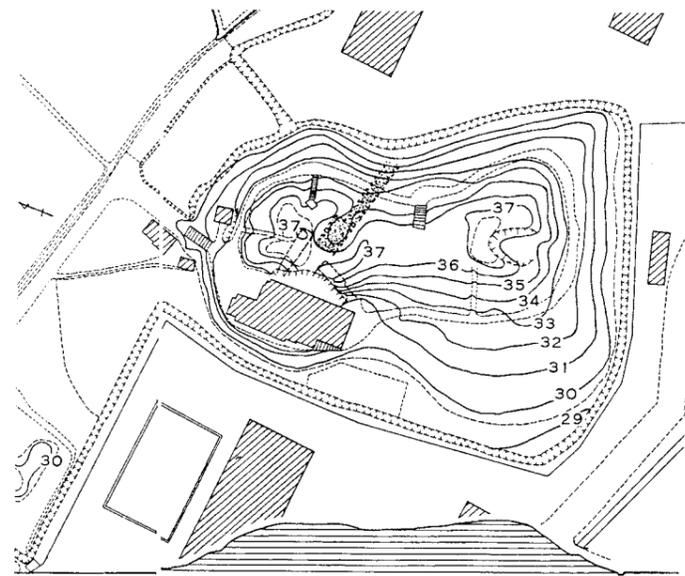
片平大塚  
0 30m  
図出典：宮内庁蔵陵墓図



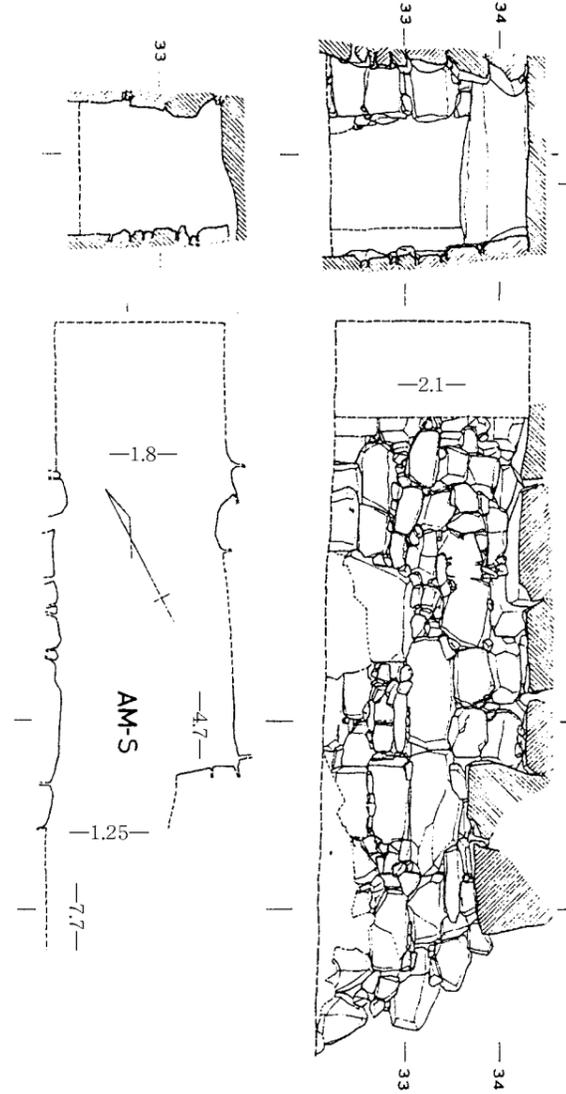
蛇塚古墳の墳丘（『近畿地方古墳墓の調査』3 昭和13年より）



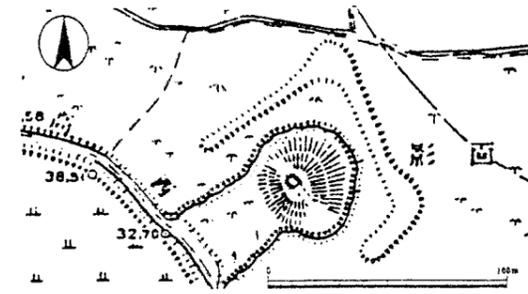
後円部の周辺道路下から出土した須恵器  
（『京都市内遺跡立会調査概報 昭和63年度』より）



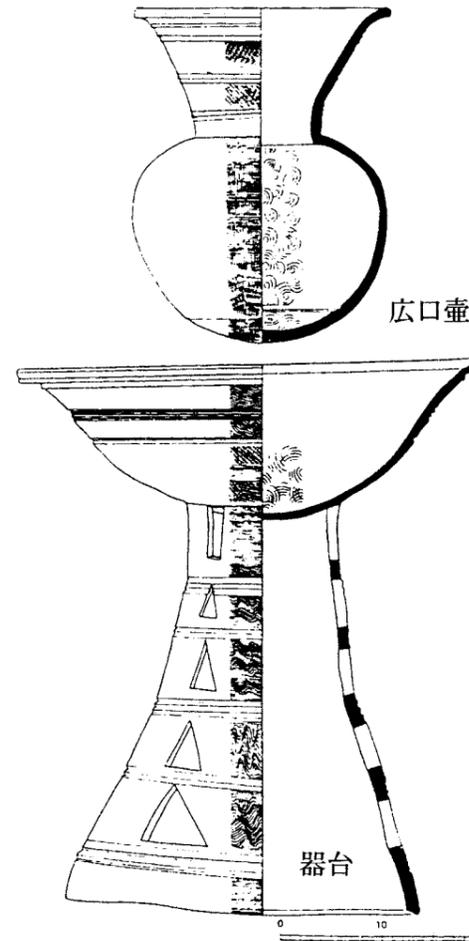
天塚古墳（『嵯峨野の古墳時代』1971年より）



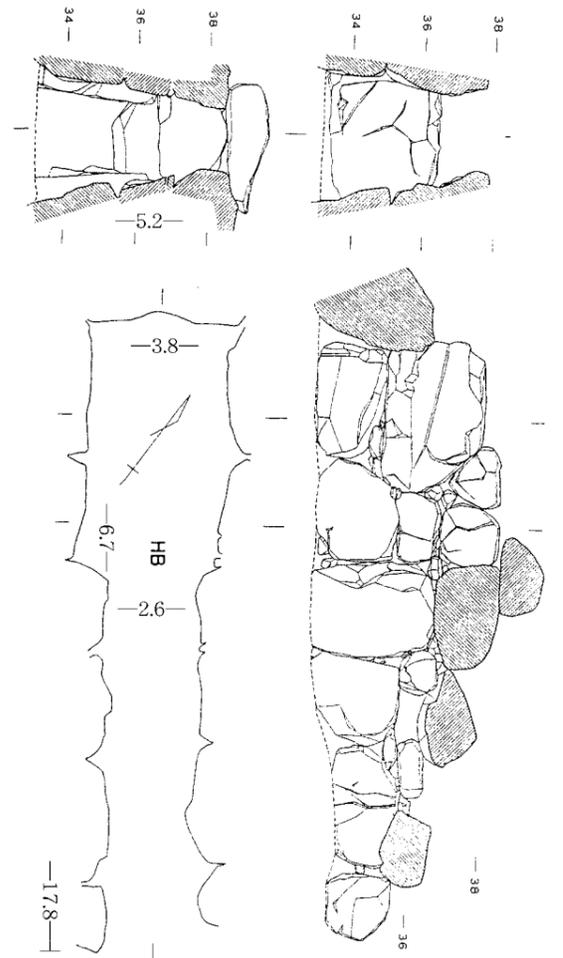
天塚古墳の横穴式石室  
（くびれ部の南西に構築されたもの。  
『嵯峨野の古墳時代』より）



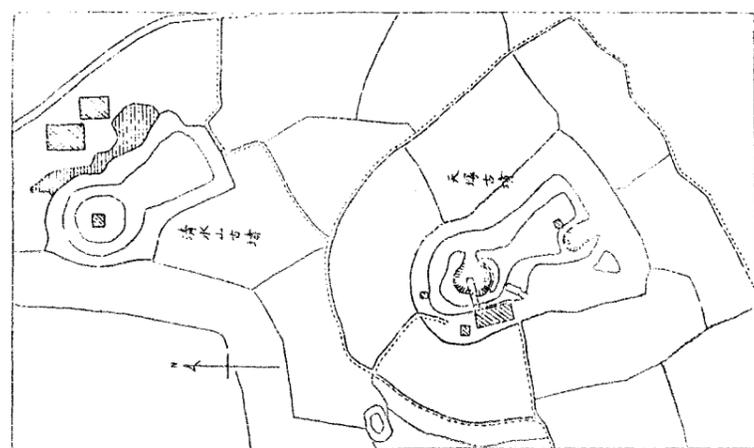
蛇塚古墳の墳丘 大正から昭和初め頃



天塚古墳出土須恵器（『嵯峨野の古墳時代』より）



蛇塚古墳の横穴式石室  
（『嵯峨野の古墳時代』1971年より）



天塚古墳と清水塚古墳  
（『京都府史跡勝地調査会報告』第3冊1992年より）

1-1 応神14年条

是歳、弓月君、百濟より來歸り。因りて奏して曰さく、「臣、己が國の人夫、百二十縣を領して歸化く。然れども新羅人の拒くに因りて、皆加羅國に留れり」とま

1-2 応神16年8月条

八月に、平群木菟宿禰、的戸田宿禰を加羅に遣す。仍りて精兵を授けて、詔して曰はく、「製津彦、久に還こす。必ず新羅の拒くに由りて滞れるならむ。汝等、

2-1 雄略12年10月条

冬十月の癸酉の朔壬午に、天皇、木工鬮鷄御田一本に猪名部御田と云ふは、蓋し誤なり。に命せて、始めて樓閣を起りたまふ。是に、御田、樓に登りて、四面に疾

2-2 雄略15年条

十五年に、秦の民を臣連等に分散して、各欲の隨に驅使らしむ。秦造に委にしめす。是に由りて、秦造酒、甚に以て憂として、天皇に仕へまつる。天皇、愛び

2-3 雄略16年7月条

十六年の秋七月に、詔して、桑に宜き國縣にして桑を殖えしむ。又桑の民を散ちて遷して、庸調を獻らしむ。

4-3 皇極2年11月条

是に由りて、山背大兄王等、四五日の間、山に淹留りたまひて、得喫飯らず。三輪文屋君、進みて勸めまつりて曰さく、「請み、深草屯倉に移向きて、茲より馬に

2-3註「伴造」

伴造(四九四頁注六) たとえば大伴・物部・土師・秦・漢などの諸氏族が伴造であり、伴造は総括的には部の管理者と考えてよいが、本来は伴(佐)を統率して大和朝廷に奉仕したものである。伴とは、同じ部類に属する人々の集団をいい、具体的には世襲的な職業をもつて朝廷に仕えた官人の団

3-1註「秦大津父」

八他に見えず。秦氏は応神朝に南鮮から渡來した弓月君(融通君)の子孫と伝える帰化人の雄族で、中国系と称した。山城の葛野(葛野)を本居とし、京都盆地・淀川北岸一帯・近江の朴市(愛智)などに広く蕃延した。造姓で、のち天武十二年九月に連、同十四年六月に忌寸に改姓、その一部は延暦年間に宿禰に改姓した。

3-2註「秦人」

秦人・漢人(六五頁注二六・二七) 秦人は朝鮮からの帰化人で中国系と称する。姓氏録などでは秦氏の同族として記述しているが、もとは秦氏の配下にあつたもの。仁徳記に秦人を役して茨田(の)の堤と屯倉(の)を作つたとあるのを、仁徳十一年条では新羅人を役したと書いている。秦部との相違は必ずしも明確ではないが、秦部が部民すなわち被支配階級に属する一般農民層であるのに対して、秦人は漢人と同じく、単なる部民ではなく、下流の小豪族層と考えられる。地方に広く分布し、中央の秦氏の管掌下に絹織物の貢上を職としたとふつう考えられている。

3-1 欽明即位前紀

有りて云さく、「天皇、秦大津父といふ者を寵愛たまはば、壯大に及びて、必ず天下を有らさむ」とまうす。寐驚めて使を遣して普く求むれば、山背國の純那の深草里より得つ。姓字、果して所夢ししが如し。是に、忻喜びたまふこと身に遍ちて、未曾しき夢なりと歎めたまふ。乃ち告げて曰はく、「汝、何事か有りし」とのたまふ。答へて云さく、「無し。但し臣、伊勢に向りて、商價して來還るとき、山に二つの狼の相闘ひて血に汚れたるに逢へりき。乃ち馬より下りて口手を洗ひ漱ぎて、祈請みて曰はく、「汝は是貴き神にして、龜き行を樂む。儼し獵士に逢はば、禽られむこと尤く速けむ」といふ。乃ち相闘ふことを抑止めて、血れたる毛を拭ひ洗ひて、遂に遣放して、俱に命全けてき」とまうす。天皇曰はく、「必ず此の報ならむ」とのたまふ。乃ち近く侍へしめて、優く寵みたまふこと日に新なり。大きに饒富を致す。踐 祚すに及至りて、大藏省に拜たまふ。

3-2 欽明元年8月条

八月に、高麗・百濟・新羅・任那、並に使を遣して獻り、並に貢職備る。秦人・漢人等、諸蕃の投化ける者を召し集へて、國郡に安置めて、戸籍に編貫く。秦人の戸の數、總べて七千五百三十三戸。大藏掾を以て、秦伴造としたまふ。

4-1 推古11年11月条

4-2 推古18年10月9日条

十一月の己亥の朔に、皇太子、諸の大夫に謂りて曰はく、「我、尊き佛像有りて。誰か是の像を得て恭拜らむ」とのたまふ。時に、秦造河勝進みて曰はく、「臣、拜みまつらむ」といふ。便に佛像を受く。因りて蜂岡寺を造る。

4-3 推古31年7月条

三十一年の秋七月に、新羅、大使奈末智洗爾を遣し、任那、達率奈末智を遣して、並に來朝り。仍りて佛像一具及び金塔并て舍利を貢る。且大きな觀頂帽一具・小幡十二條たてまつる。即ち佛像をば葛野の秦寺に居しませしむ。

4-4 皇極3年7月条

秋七月に、東國の不盡河の邊の人大生部多、蟲祭ることを村里の人に勸めて曰はく、「此は常世の神なり。此の神を祭る者は、富と壽とを致す」といふ。巫覡等、遂に詐きて、神語に託せて曰はく、「常世の神を祭らば、貧しき人は富を致し、老いたる人は還りて少ゆ」といふ。是に由りて、加勸めて、民の家の財寶を捨てしめ、酒を陳ね、菜・六畜を路の側に陳ねて、呼はしめて曰はく、「新しき富入來れり」といふ。都鄙の人、常世の蟲を取りて、清座に置き、歌ひ舞ひて、福を求め珍財を棄捨つ。都て益す所無くして、損り費ゆること極て甚し。是に、葛野の秦造河勝、民の惑はざるを惡みて、大生部多を打つ。其の巫覡等、恐りて勸め祭ることを休む。時の人、便ち歌を作りて曰はく、

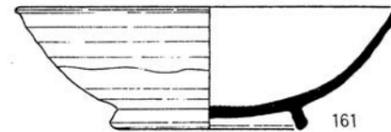
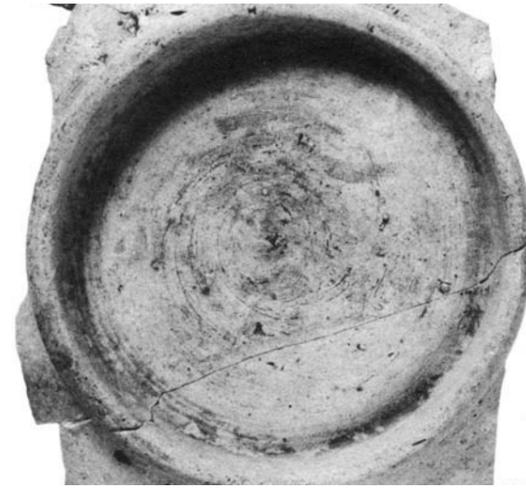
4-4註「葛野、太秦」

葛野は住地。奈良朝以後の山城國葛野郡は、今の京都市西半、右京区にあたり。この頃はまだ京都盆地一帯を葛野という。秦造河勝は推古十一年十一月条に蜂岡寺の造立にちなんで現われる。河勝が大生部多を打つた理由は大生部多が秦氏の所撰であったから(通証)とも、河勝が國司にでも任ぜられたからであろう(通釈)ともいうが、河勝に仏教を代表させ民間信仰のな道教を圧えたことをあらわすか。

『日本書紀』『続日本記』にみえる秦氏

天皇	事跡	天皇年号	事跡
600	603.11 秦造河勝	文武 大宝	702.4 秦忌寸広庭
		文武 慶雲	705.1 秦忌寸百足
610	610.10 秦造河勝	元明 和銅	
推古		元明 靈龜	710.3 平城京遷都
620	623.7 (葛野秦寺)	元正 養老	719.6 秦朝元 720.6 秦犬麻呂 721.1 秦朝元
		神龜	726.1 秦忌寸足国
630		神龜	730.3 秦朝元 731.1 秦朝元
舒明		聖武	734.1 秦忌寸大宅 735.4 秦朝元 737.12 秦忌寸朝元
640	643.11 秦造河勝	天平	740.10 秦忌寸ら 741.12 秦前大魚 742.8 秦下鴨麻呂 743.5 秦井手乙麻呂
皇極	645.6 大化改新	天平	745.5 秦公嶋麻呂 746.3 秦朝元 747.3 秦忌寸嶋麻呂 748.5 秦老ら
650		孝謙 天平勝宝	750.1 秦忌寸首麻呂 752.10 飯麻呂(伊世)
孝德		孝謙 天平勝宝	757.8 秦氏の民
660	658.10 秦大藏造万里 661.8 秦造田來津(近江) 663.8 秦造田來津(近江)	淳仁 天平宝字	
齊明		淳仁 天平宝字	764.10 秦忌寸智麻呂, 秦忌寸伊波太氣 765.1 秦忌寸公足 766.12 秦勝古麻呂(大和) 767.1 秦忌寸養守 768.3 秦忌寸弟麻呂 769.3 秦忌寸智麻呂 769.5 秦井手小足, 秦嶋神, 秦人広立(摂津) 770.3 秦刀良(備前)
670	672.6 秦造熊 672.7 秦友足	天智 天智	765.2 秦忌寸の者たち 766.3 秦田比登淨足(伊予) 767.5 秦忌寸養守 768.7 秦忌寸真成 769.11 秦長田三山, 秦倉人哲主, 秦姓綱麻呂 769.10 秦勝倉下(讃岐) 770.8 秦忌寸真成
天智	672.6 壬申の乱	光仁 宝龜	774.3 秦忌寸伊波多氣, 秦忌寸真成, 秦忌寸養守 776.3 秦忌寸石竹 776.12 秦忌寸長野(大和), 秦忌寸養造
680	680.5 秦造綱手 683.9 秦造ら38氏 685.6 秦連ら11氏 686.6 秦忌寸石勝	天武 天武	781.11 朝原忌寸道永 782. 朝原忌寸道永 783.11 朝原忌寸道永 784.1 秦忌寸長足 785.1 秦忌寸馬長, 秦忌寸長足 787.3 朝原忌寸道永 788.7 大秦忌寸宅守 789.3 大秦忌寸宅守 790.3 秦造小嶋 791.1 大秦忌寸疾刀自女 792.1 秦忌寸刀自女
690		桓武 桓武	784.11 長岡京遷都 784.11 秦造小嶋 784.12 秦忌寸足長 785.7 秦忌寸馬長 785.8 大秦忌寸宅守 785.10 秦忌寸足長 788.8 穴咋哲麻呂(対馬)
700	696.5 秦造綱手 698.4 秦大兄(備前)		794.10 平安京遷都

(『第16回京都市埋蔵文化財研究会資料』2009年より)



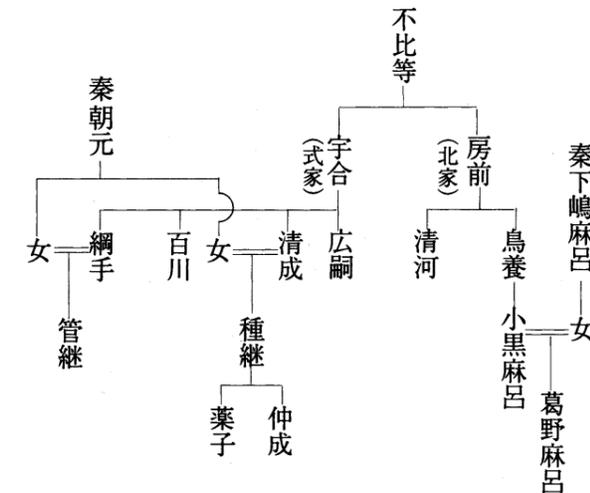
161 墨書土器「秦立」

北区北野上白梅町 北野廃寺

口径16.2cm 器高5.2cm 高台径8.3cm

灰釉陶器碗の底部に「秦立」と墨書されている。「佛所」と墨書された灰釉陶器碗(写21-38)とともに出土した。北野廃寺が秦氏と関係深いことを示す資料である。10世紀

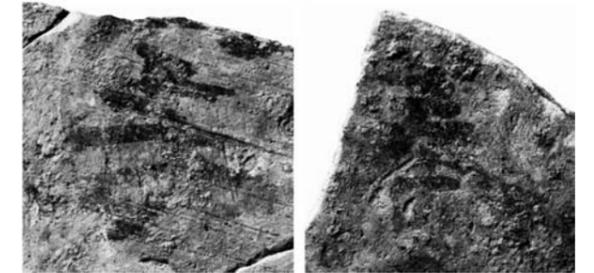
北野廃寺から出土した墨書土器  
(『平安京跡発掘資料選(二)』1986年より)



藤原氏と秦氏(中村修也『秦氏とカモ氏』1994年より)

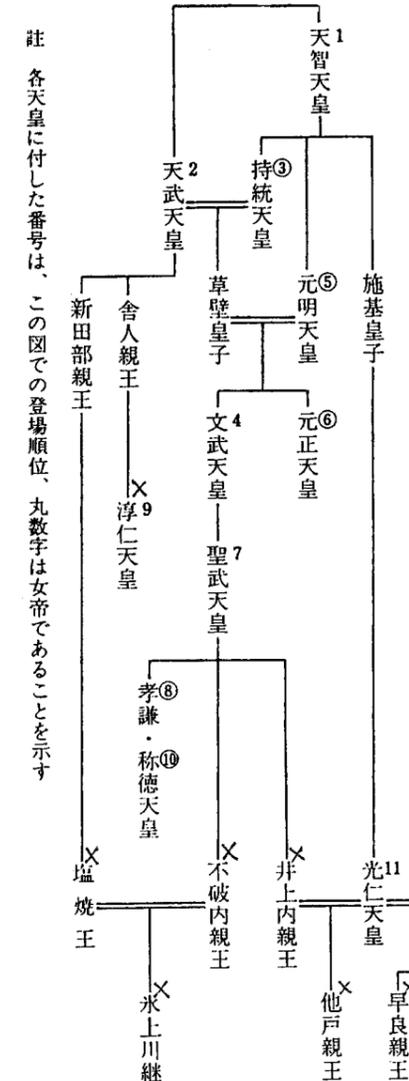


如来像を線刻した石片



「口寺」 「秦」

墨書土器(リーフレット京都No.115 1998年より)



天武統と天智統(『古代を考える 難波』1992年より)